

応募のプロから一筆啓上

横山昌佳（まーしー）

十年続けるとプロになれる。何事も、十年努力すればものになる。著名な人物はそう口を揃え、物の本にも書いてある。それで、大学生の頃から小説を書いては様々な文学賞に応募し、応募してはまた書いた。十年、二十年が経って、ようやくぼくはプロになった。

応募のプロになったのである。

例えば、原稿に一筆手紙を添えるべきか、という問題がある。結論から言うと、その一筆は審査に関係がない。が、原稿を受け取る人や読む人のことを考えると、評価に影響しないとしても、やはり一筆添えるべきであろう。これがプロの心構えである。



プロ（千葉真隆氏）に撮ってもらった写真

さて、ナマステに掲載するに当たっては、自然文化誌研究会の趣旨に沿ったものとした。小菅村のキャンプを通した環境教育の実践。その上で、小説を書く意義とは何か。

レオ・レオニ「フレデリック」の中で、主人公は周りの野ねずみが立ち働く中、寝っ転がって何もしない。「言葉を集めている」と言って、何もしない。やがて、冬が来て穴に籠もり、仲間たちは無聊に苦しみ始める。そこで、フレデリックは話し出すのだ。青い空や金色の光、季節を言祝ぐ詩の数々を。

薪を割ったり食事を作ったり、沢登りの指導をしたり。キャンプでは様々なアクティビティがあるが、その中でぼくは言葉を集めている。小説というのはつまり、目に見えない・役に立たない部分を言語化する作業である。「活動記録」ではこぼれ落ちてしまうものを拾い、フィクションとして復元する。

いつだったか、到着した子供たちにキャンプ場を案内し始めたとき、

「まーしーは、来年も来る？」

と訊かれたことがあった。「仲良くなっても良いか」を、事前に確認したのである。これっきりの人とは友達になっても寂しいだけだ、だから、前もって「この人との関係が今後も続くか」を訊ねたのだ。

ぼくが注目するのはこういう心象である。人間と人間とが触れ合う中の、プリミティブな感情。写真や出来事の記録では見えないし、見えるまでに時間もかかる。焚き火をしたり、佐々木さんの声を聞きながら星空の下で寝てしまったり。その非言語的な体験を、小説の形で言語化していく。

ぼくは応募のプロである。だから、落選しても諦めないし、再び書くのをためらわない。キャンプで酒を飲んでいるだけ、と言われても苦にしない（ちょっと気にする）。ぼくは書く。何度でも書く。穴ぐらの中でひっそりと、ねずみのフレデリックよろしく。

そういうわけさ。